

[報告 3]

## 新時代を生き抜く農業経営と農協の担い手育成

笠井実 (青森県五所川原市・農業)

平成 6 年に米が自由化されてから、日本の農政は急激に変化してきた。生産現場を重視する生産農政から消費者、国民農政へのシフトであり、農家側からすれば非常に厳しい状況ではある。しかし、食料・農業の世界的な情勢からいえば、我々には大きなチャンスであるともいえる。つまり、世界的には人口が急増しており、食糧事情では、需要に見合った供給ができていない。そんな中、我が国の食糧自給率は 40% しかないのである。そういうところを見据えながら、厳しい現状をどう乗り切れるかを模索していく必要があると考えている。

### 徹底した話し合いによって農地集積を進める

私たちの地域では、20 年前から農地の利用集積に取り組んでいる (『平成五年度農業白書』180p)。当時、私は 12 名の農家から 22ha の農地を借りて規模拡大を図ったが、その農地は 42 ヶ所に分散していた。農地や作業を委託する場合、どうしても親戚や知人へ頼むことになり、結果として集落のどの農家も、その農地は数ヶ所に分散しているのが普通であった。

そこで私は、集落 72 戸の農家を集会所に集め、行政に頼らずにムラを変える運動を始めようと提案した。誰の農地がどこにあって、どのくらいの規模で、いつまで耕作するのか、その後は誰に耕作してもらえば合理的なのかということ、座談会で徹底的に話し合った。座談会は 1 ヶ月に 2 回の割合で開催し、私は、3 年間で延べで 120 回ほど農家を回った。そして、3 年がかりで農地の集積を行なったのである。

その過程で私が驚いたことは、「農地を売りたい」という人が 7 人出てきたことだった。以前なら、農地を売るといのは恥をさらすようなことであったのだが、話し合いの中では、売買、賃借、交換耕作等を行ない、自然にそういう動きが出てきたのであ

る。そのおかげで合理的な農地の集積が実現したという部分もある。今、農業の現場では高齢化が進み、今後数年の間に、自然発生的な農地の流動化が予測される。JA はこれから、こういった座談会を徹底的に行い、農地を合理的に管理していく必要があるだろう。



### JA は思い切った内部改革で地域農業の牽引を

集落営農等、担い手についてはいろいろな取組がされているが、基本的な考え方としては、農家のために何ができるか、農家の利益をどう守っていかれるかという視点が重要だ。法人や集落営農などの組織経営のほかにも、小さい農家の経営体をどう立ち上げるかということも視野に入れなければならないだろう。私の集落では、4 町歩の要件をクリアするために 62 戸の農家が話し合っ、この冬、全員を担い手対象にした。たとえば 3ha の農家と 1ha の農家で話し合い、貸し借りをして 4 町歩にするといった具合だ。担い手対象にならない小さな農家では、生産調整である (転作) はできないので、全部水稻作付となる。それは結果的に JA 離れにもつながる。

いろいろな面で、これから JA の農家対応は非常に重要であり、そのためにはやはり、JA 内部の思考改革が必要だ。私が提案したいのは、JA の改革は経営を担う人材の確保で決まる。今の理事構成は農家代表だけだが、必ずしも知識、情熱に優れているとは思えない。農業外からも有能な人材を起用すべきだと思う。次に、リーダーの育成にお金をかけること。ボランティアでは誰もいい活動はできない。実績報酬のような、それなりの活動をした人には手厚い助成を行なうというような体制を整えなければ、よいリーダーや指導者は生まれてこないと思う。

また、生産調整に取り組まなければ米づくりができないというような思い切った検討をしてもよいのではないだろうか。生産調整に加入し、麦・大豆に履かせているゲタを米にも。このことによって、全農家が生産調整を自主的に取り組むようになる。また一方では、消費者に安い米を提供することが可能になり多少なりとも消費動向に影響を与えることができる。我々農業者組織も、こういった改革を、声を大にして JA に要望していきたいと思っている。

## 【1 日目総合討論から】

—— 土地利用型の担い手を作るということは、つきつめて言えば農地や農作業受託をいかに集積するかという点につきる。そういう意味では、JA は何度も集落に入って行って話を繰り返していくしかないのだが、非常にコストもかかるし、それが結果として JA の事業に返ってくるという自信もない。そうなると、JA としては二の足を踏んでしまう部分もあるのではないか。

**笠井** JA の職員ではなく役員が、昼間の勤務を控えて夜は毎晩集落座談会に通うというくらいの改革ができなければダメだ。